Mission
６０分で２５／４０点を突破せよ！

第八講　過去問実践演習　２０１４年第一問

次の文章は、ある精神分析家が自身の仕事と落語とを比較して述べたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

いざ仕事をしているときの落語家と分析家に共通するのは、まず圧倒的な孤独である。落語家は金を払って「楽しませてもらおう」とわざわざやってきた客に対して、たった一人で対峙（たいじ）する。多くの出演者の出る寄席の場合はまだいいが、独演会になるとそれはきわだつ。他のパフォーミングアート、たとえば演劇であれば、うまくいかなくても、共演者や演出家や劇作家や舞台監督や装置や音響のせいにできるかもしれない。落語家には共演者もいないし、みんな同じ古典の根多（ねた）を話しているので作家のせいにもできず、演出家もいない。すべて自分で引き受けるしかない。しかも落語の場合、反応はほとんどその場の笑いでキャッチできる。残酷なまでに結果が演者自身にはねかえってくる。受ける落語家と受けない落語家ははっきりしている。その結果に孤独に向き合い続けて、ともかくも根多を話し切るしかない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

分析家も毎日自分を訪れる患者の期待にひとりで対するしかない。そこには誰(だれ)もおらず、患者と分析家だけである。私のオフィスもそうだが、たいてい受付も秘書もおらず、まったく二人きりである。そこで自分の人生の本質的な改善を目指して週何回も金を払って訪れる患者と向き合うのである。分析料金はあまり安くない。普通の医者が一日数十人を相手にできるのに対して、七、八人しか会えないので、一人の患者からある程度いただかないわけにはいかないからだが、たいてい高いと思われる。真っ当な鮨(すし)屋が最初高いように思えることと似ている。そういう料金を払っているわけであるから、患者たちは普通もしくは普通以上に[a]カセいでいる。社会では一人前かそれ以上に機能しているのだが、パーソナルな人生に深い苦悩や不毛や空虚を抱えている人たちである。こういう人たちに子どもだましは通用しない。単なる[b]ナグサめや励ましはかえって事態をこじらす。そうしたなかで、分析家はひとりきりで患者と向き合うのである。何の成果ももたらさないセッションも少なくない。それでもそこに五十分座り続けるしかない。

　多くの観衆の前でたくさんの期待の視線にさらされる落語家の孤独。たったひとりの患者の前でその人生を賭(か)けた期待にさらされる分析家の孤独。どちらがたいへんかはわからない。いずれにせよ、彼らは自分をゆす

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
６０分で２５／４０点を突破せよ！

ぶるほど大きなものの前でたったひとりで事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出すことが要求されている。それに失敗することは、自分の人生が微妙に、しかし確実に[c]オビヤかされることを意味する。客が来なくなる。患者が来なくなる。

おそらく[ア]このこころを凍らせるような孤独のなかで満足な仕事ができるためには、ある文化を内在化して、それに内側からしっかりと抱えられる必要がある。濃密な長時間の修業、パーソナルで[d]ジョウショ的なものを巻き込んでの修業の過程は、それに役立っているだろう。落語家も分析家も文化と伝統に抱かれて仕事をする。しかし、そうした内側の文化がそのままで通用することは、落語でも精神分析でもありえない。ただ、根多を覚えたとおりにやっても落語にはならないし、理論の教えるとおりに解釈をしても精神分析にはならない。観客と患者という他者を相手にしているからだ。

演劇などのパフォーミングアートにはすべて、何かを演じようとする自分と見る観客を喜ばせようとする自分の分裂が存在する。それは「演じている自分」とそれを「見る自分」の分裂であり、世阿弥が「離見の見」として概念化したものである。落語、特に古典落語においては、習い覚えた根多の様式を踏まえて演(や)りながら、たとえばこれから自分が発するくすぐ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

りをいま目の前にいる観客の視点からみる作業を不断に繰り返す必要がある。昨日大いに観客を笑わせたくすぐりが今日受けるとは限らない。彼はいったん今日の観客になって、演じる自分を見る必要がある。完全に異質な自分と自分との対話が必要なのである。

しかも落語という話芸には、他のパフォーミングアートにはない、さらに異なった次元の分裂の[e]ケイキがはらまれている。それは落語が直接話法の話芸であることによる。落語というものは講談のように話者の視点から語る語り物ではない。言ってみれば地の文がなく、基本的に会話だけで構成されている。端的に言って、落語はひとり芝居である。演者は根多のなかの人物に瞬間瞬間に同一化する。根多に登場する人物たちは、おたがいにぼけたり、つっこんだり、だましたり、ひっかけたりし合っている。そうしたことが成立するには、おたがいがおたがいの意図を知らない複数の他者としてその人物たちがそこに現れなければならない。落語が生き生きと観客に体験されるためには、この他者性を演者が徹底的に維持することが必要である。[イ]落語家の自己はたがいに他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する。私の見るところ、優れた落語家のパフォーマンスには、この他者性の維持による生きた対話の運動の心地よさが不可欠である。それはある種のリアリティを私たちに供給し、そのリア

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
６０分で２５／４０点を突破せよ！

リティの手ごたえの背景でくすぐりやギャグがきまるのである。

おそらく落語という話芸のユニークさは、こうした分裂のあり方にある。もっと言えば、そうした分裂を楽しんで演じている落語家を見る楽しみが、落語というものを観る喜びの中核にあるのだと思う。そして、人間が本質的に分裂していることこそ、精神分析の基本的想定である。意識と無意識でもいい、自我と超自我とエスでもいい、精神病部分と非精神病部分でもいい、本当の自己と偽りの自己でもいい、自己のなかに自律的に作動する複数の自己があって、それらの対話と交流のなかにゥひとまとまりの「私」というある種の錯覚が生成される。それが精神分析の基本的な人間理解のひとつである。落語を観る観客はそうした自分自身の本来的な分裂を、生き生きとした形で外から眺めて楽しむことができるのである。分裂しながらも、ひとりの落語家として生きている人間を見ることに、何か希望のようなものを体験するのである。

ェ精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている。分析家が患者の一部分になることを通じて患者を理解することを前に述べた。たとえば、こころのなかに激しく自分を迫害する誰かとそれにおびえてなすすべもない無力な自分という世界をもっている患者は、分析家に期待しながらも、迫害されることにおびえて、分析家を遠ざけ絶えず疑惑の目を向け拒絶的になる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

分析家はやがてそのような患者を疎ましく感じ、苛立ち、ついに患者に微妙につらく当たるようになる。こうした過程を通して分析家はまさに患者のこころのなかの迫害者になってしまう。さらに別のことも起きる。分析家は何を言っても患者にはねかえされ、どうしようもないと感じ、なすすべもない無力感を味わう。それは患者のこころのなかの無力な自己になってしまったということである。こうして患者のこころの世界が精神分析状況のなかに具体的に姿を現し、分析家は患者の自己の複数の部分に同時になってしまい、その自己は分裂する。

もちろん、そうして自分でないものになってしまうだけでは、精神分析の仕事はできない。分析家はいつかは、分析家自身の視点から事態を眺め、そうした患者の世界を理解することができなければならない。そうした理解の結果、分析家は何かを伝える。そうして伝えられる患者理解の言葉、物語、すなわち解釈というものに患者は癒される部分があるが、おそらくそれだけではない。分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見ることができる。オ生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてもいるのだろう。自分はこころのなかの誰かにただ無自覚にふりまわされ、突き動かされていなくてもいいのかもしれない。ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在でありうるかもしれ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
６０分で２５／４０点を突破せよ！

ないのだ。

（藤山直樹『落語の国の精神分析』）

〔注〕
○根多――「種（たね）」を逆さ読みにした語。
○くすぐり――本筋と直接関係なく挿入される諧謔（かいぎゃく）。
○自我と超自我とエス――フロイト（Sigmund Freud　一八五六～一九三九）によって精神分析に導入された、自己に関する概念。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

㈠　「このこころを凍らせるような孤独」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

㈡　「落語家の自己はたがいに他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

㈢　「ひとまとまりの「私」というある種の錯覚」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

㈣　「精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

㈤　「生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてもいる」（傍線部オ）とあるが、なぜそういえるのか、落語家との共通性にふれながら一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

㈥　傍線部a、b、c、d、eのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a　カセ（いで）　b　ナグサ（め）　c　オビヤ（かされる）　d　ジョウショ　e　ケイキ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(一)	(二)	(三)	(四)

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

㈥

a

b

c

d

e

㈤

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第八講　過去問実践演習

２０１４年　第一問　藤山直樹『落語の国の精神分析』

要旨

落語家も精神分析家も、金を払い職能に期待する他者に一人で向き合い成功しないと、職業生命が脅かされるという孤独の中で生きている。
また、落語家も精神分析家も、対象の中の複数の他者と同一化し、かつ対話と交流により相手を理解する一人の自律的な精神を作り生きている。
患者はそのような精神分析家の姿を見て、分裂している自分を重ね合わせ、自分も一人の自律的な存在として生きる可能性を感じる。

解答（40点）

㈠（5点）
落語家も精神分析家も、金を払い職能に期待する他者に一人で向き合い生きて成功しないと、職業生命が脅かされるという孤独。

解答ポイント
①落語家も精神分析家も（1点）
②金を払い職能に期待する他者に一人で向き合い（2点）
③生きて成功しないと、職業生命が脅かされる（2点）

㈡（5点）
落語家は根多に登場するたがいに意図を知らない複数の他者たちにその都度同一化し、ひとり芝居で生きた対話をするということ。

解答ポイント
①根多に登場するたがいに意図を知らない複数の他者たちにその都度同一化（3点）
②ひとり芝居で生きた対話をする（2点）

㈢（5点）
自己の中の自律的に作動する複数の自己との対話と交流のなかで、自分が一人の個として自律的な存在であると思い込むこと。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

解答ポイント

① 自己の中の自律的に作動する複数の自己との対話と交流のなかで（3点）

② 自分が一人の個として自律的な存在であると思い込む（2点）

㈣（5点）

精神分析家も落語家も、対象の世界の中にある異なる複数の他者に同一化し、自己の中で対話と交流を行う必要があるということ。

解答ポイント

① 精神分析家も落語家も（1点）

② 対象の世界の中で異なる複数の他者に同一化（2点）

③ 自己の中で対話と交流を行う（2点）

㈤（10点）

落語家と同様に精神分析家も、対象の中の複数の他者と同一化し、対話と交流をしながらも、一人の自律的な存在として生きている。患者は分析家の姿を見て、分裂している自分を重ね合わせ、自分も一人の自律的な存在として生きる可能性を感じるから。

解答ポイント

① 落語家と同様に精神分析家も（2点）

② 対象の中の複数の他者と同一化し　㈡・㈣（2点）

③ 対話と交流により相手を理解する一人の自律的な精神を作り生きている　㈢（2点）

④ 患者は分析家の姿を見て、分裂している自分を重ね合わせ（2点）

⑤ 自分も一人の自律的な存在として生きる可能性を感じる（2点）

㈥ a 稼　b 慰　c 脅　d 情緒　e 契機（各2点）

解説

㈠ **傍線部内容説明問題**

傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、「この」という指示語、「こころを凍らせるような」という比喩表現、「孤独」という筆者特有の用語がそれぞれポイントであることがわかる。よ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

って、それらのポイントを説明するための根拠を本文中に求める。

　まず、「この」の指示内容を求めると、第三段落一文目二文目に「多くの観衆の前でたくさんの期待の視線にさらされる落語家の孤独。たったひとりの患者の前でその人生を賭けた期待にさらされる分析家の孤独」とある。よって、この孤独は第一段落一文目にもあるように①「落語家と精神分析家に共通する孤独」であるとわかる。

　次に「孤独」であるが、それは第一段落二文目「落語家は金を払って『楽しませてもらおう』とわざわざやってきた客に対して、たった一人で対峙する」と、第二段落一文目「分析家も毎日自分を訪れる患者の期待にひとりで対するしかない」という部分から、②「金を払い職能に期待する他者に一人で向き合う」ことであるとわかる。

　最後に「心を凍らせるような」であるが、第三段落四文目から七文目に説明がある。「いずれにせよ、彼らは自分をゆすぶるほど大きなものの前でたったひとりで事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出すことが要求されている」という文から、Ｐ「落語家、精神分析家」であるためには、Ｑ「自分をゆすぶるほど大きなものの前でたったひとりで事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出す」ことが必要であるとわかる。そしてその対偶として、「それに失敗することを意味する。自分の人生が微妙に、しかし確実に脅かされる」という部分がある。客が来なくなる。患者が来なくなる。これは「それに失敗することは」という部分が「Ｑでないならば」＝「成果を生み出すことができないならば」となり、「客が来なくなる。患者が来なくなる」という部分が、「Ｐでない」＝「落語家、精神分析家でなくなる」となる。よって、「心を凍らせる」は③「職業生命が脅かされる」となる。「人生」や「生計」が「脅かされる」としてはならない（失業しても死にはしないし、転職すればお金は手に入るからである）。

　以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

(二)　傍線部内容説明問題

　傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、「たがいに他者性を帯びた」という筆者特有の表現、「何人もの他者たち」という筆者特有の表現、「分裂」という筆者特有の表現がそれぞれポイントであることがわかる。よって、以上のポイントを説明するための根拠を本文中に求める。

　まず「たがいに他者性を帯びた」であるが、第六段落八文

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

目の①「おたがいがおたがいの意図を知らない」という部分である。

そして、「何人もの他者たちによって占められ」であるが、第六段落五文目六文目にあるように「ひとり芝居」において①「根多のなかの人物に瞬間瞬間に同一化する」することである。

次に「分裂」であるが、第六段落十一文目にあるように②「他者性の維持による生きた対話」をすることである。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

㈢ 傍線部内容説明問題

傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。まず傍線部を分析すると、「ひとまとまりの『私』」という筆者特有の表現、「ある種の錯覚」という筆者特有の表現がそれぞれポイントであることがわかる。よって、これらのポイントを説明するための根拠を本文中に求める。

まず「ひとまとまりの『私』」であるが、第九段落七文目に①「ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在」とある。

次に「ある種の錯覚」であるが、第七段落四文目に②「自己のなかに自律的に作動する複数の自己」があって、「それらの対話と交流のなかに」存在しているということから、「ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在」というのが、「錯覚」であるとわかる。

ただし、「ある種」とあることから、「錯覚」は間違いのようだけどそのような自覚は確かに存在すると思い込むという意味である。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

㈣ 傍線部内容説明問題

傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、「も」という類似のフレームワーク、「分裂」という筆者特有の表現がそれぞれポイントであることがわかる。よって、それらのポイントを説明するための根拠を本文中に求める。

まず「も」であるが、①「精神分析家」と「落語家」の類似点を指摘しなければならない。㈡で捉えた「落語家の分裂」と共通する説明に「一般化」しなければいけないことがわかる。

次に②「分裂」であるが、一度「精神分析家」の「分裂」を捉える。第八段落九文目に②「患者のこころの世界が精神分析状況のなかに具体的に姿を現し、分析家は患者の自己の複数の部分に同時になってしまい、その自己は分裂する」と

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ある。そして、㈡で捉えた「分裂」＝③「他者性の維持による生きた対話」との共通点を考える。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

㈤　傍線部理由説明問題

傍線部の飛躍を埋める論証をする問題である。ただし、今回は①「落語家との共通性にふれながら」という条件があることから、本文全体を参照して解く必要がある。傍線部を分析すると「生きた人間としての分析家自身のあり方こそが」という部分と、「患者に希望を与えてもいる」という部分に飛躍がある。よって、この飛躍を埋める論証となる部分を本文中に求める。

まず「生きた人間としての分析家自身のあり方」であるが、修飾部に「分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見ることができる」とある。このことから「分裂」しながらも「一人の人間」として生きる様を説明すれば良い。②「分裂」は㈡・㈣で捉えており、③「一人の人間」として生きるということは㈢で捉えているのでそれを利用する。

ただし、これだけでは不十分である。そのような④「分裂」をしながらも「一人の人間」として生きる「精神分析家」の姿を見て、「分裂」に苦しむ「患者」も、第九段落六文目七文目にあるように⑤「自分はこころのなかの誰かにただ無自覚にふりまわされ、突き動かされなくてもいいのかもしれない。ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在でありうるかもしれない」と思い、「希望」を持つのである。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。